

企画展

大竹伸朗展

2025.8.1(金) – 11.24(月・休)

大竹伸朗、12年ぶりのMIMOCAでの大規模個展 《網膜》の新作・未公開作を中心に

会期：2025年8月1日(金) – 11月24日(月・休)

休館日：月曜日(祝日の場合はその翌日)

会場：丸亀市猪熊弦一郎現代美術館(MIMOCA)

主催：丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、公益財団法人ミモカ美術振興財団
独立行政法人日本芸術文化振興会、文化庁

1988年に宇和島市に活動の拠点を移して以来、35年以上に渡ってこの地で制作し、国内外での幾多の個展や作品発表を続けてきた大竹伸朗(1955-)の大規模個展。2013年の「大竹伸朗展 ニューニュー」以来12年ぶりの当館での個展開催となる本展では、半世紀近くにおよぶ創作活動を通じ、圧倒的な熱量が生み出した膨大かつ多様な作品の数々から、《網膜》シリーズにフォーカスし、大竹の作品世界をさらに掘り下げます。

大竹の絵画シリーズ《網膜》では、廃棄された露光テスト用のポラロイド・フィルムに残された光の痕跡がカンヴァスに拡大転写され、その表層に透明の絵具としてウレタン樹脂が塗布されており、分離している「透明のマチエール」と「写真像の色彩」が脳内で統合し、新たな像として私たちの前に立ち現れます。

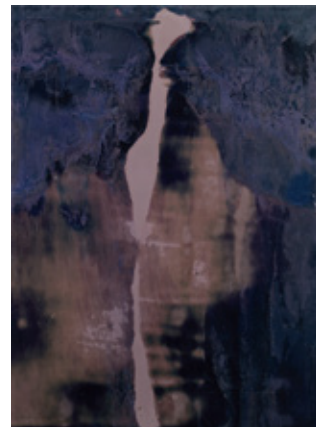
この《網膜》シリーズは、1988年に宇和島のアトリエで始まり、1991年まで集中的に制作されて以降、断続的に制作されてきましたが、本展に際し、現在、大竹は新作《網膜》の制作に集中的に取り組んでいます。大竹の活動と並走するように長期間留置されたポラロイドの感光剤の変質が、蓄積された時間の記憶として「透明のマチエール」に閉じ込められた新たな《網膜》。本展では、この新作《網膜》を核とし、未公開作や巨大な立体作品《網膜屋／記憶濾過小屋》(2014)など、《網膜》とそこに接続する多様な作品を展覧。大竹の現在地とこれからの展開を世界に向けて発信します。

大竹伸朗(おおたけ・しんろう)

1955年東京都生まれ。主な個展に東京国立近代美術館／愛媛県美術館／富山県美術館(2022-23)、熊本市現代美術館／水戸芸術館現代美術ギャラリー(2019)、パラソルユニット現代美術財団(2014)、高松市美術館(2013)、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館(2013)、アートソングセンター(2012)、広島市現代美術館／福岡市美術館(2007)、東京都現代美術館(2006)など。またハワイ・トリエンナーレ(2022)、アジア・パシフィック・トリエンナーレ(2018)、横浜トリエンナーレ(2014)、ヴェネチア・ビエンナーレ(2013)、ドクメンタ(2012)、光州ビエンナーレ(2010)、瀬戸内国際芸術祭(2010、13、16、19、22)など多数の国際展に参加。また「アゲインスト・ネイチャー」(1989)、「キャビネット・オブ・サインズ」(1991)など歴史的に重要な展覧会にも多く参加している。なお香川県内では、直島、豊島で作品を公開している。

▶公式サイト www.ohtakeshinro.com

展覧会名、会期は予定です。今後変更する場合があります。



1



2



3

- 1 《網膜／時影 1》1990-2015
Courtesy of Take Nianagawa / Photo by Kei Okano
- 2 《網膜屋／記憶濾過小屋》2014、ヨコハマトリエンナーレ2014での展示風景
Courtesy of Take Nianagawa / Photo by Kei Okano
- 3 大竹伸朗展 ニューニュー(2013、MIMOCA)での展示風景
Photo by Masahito Yamamoto
- 1-3 ©Shinro Ohtake



令和6年度日本博2.0事業(委託型)

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館(MIMOCA)について

〈1991年開館、30年を超える活動〉

1991年11月23日、JR丸亀駅前に開館。同時代の新しい表現を積極的に紹介する「現代美術館」を望んだ猪熊弦一郎の考えを継ぎ、猪熊作品を中心とした常設展、現代美術にフォーカスした企画展、子どものためのワークショップなど、多彩なプログラムを展開しています。

〈猪熊弦一郎の作品約2万点を収蔵〉

猪熊弦一郎の遺した絵画やドローイングなど作品約2万点を所蔵し、猪熊が「対話彫刻」と名付けた小さな作品群、猪熊夫妻が各地で収集しその生活を彩っていたコレクションなどの多数の資料とともに、常設展や企画展を通して、猪熊の活動を深く、広く紹介しています。

〈現代美術に特化した美術館として〉

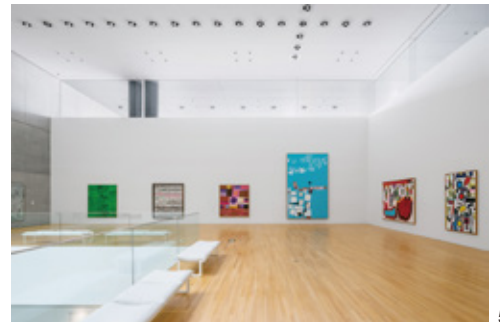
現代美術を中心とし、企画展として国内外のアーティストの活動を展覧。これまでにヤン・ファール、マリナー・アブラモヴィッチ、マルレーネ・デュマス、エルネスト・ネット、杉本博司、塩田千春、ホンマタカシ、石内都らの個展を開催する一方、金氏徹平、小金沢健人、志賀理江子、中園孔二ら気鋭のアーティストの紹介にも積極的に取り組み、近年では若手作家を対象とした公募展「MIMOCA EYE」を立ち上げました。また、同時代のクリエイティブな表現にも着目し、ファッションやファニチャーといったデザイン、現代建築にも拡張しています。

〈谷口吉生の設計による美しい建築〉

設計は、数々の美術館建築を手がけ、高い評価を受ける谷口吉生。猪熊との対話によって、アーティストと建築家の理念が細部に至るまで具現されています。猪熊弦一郎の巨大な壁画《創造の広場》が眼を引く伸びやかなファサードは、駅前広場と建築をゆるやかに結びつけ、館内に入ると自然光をふんだんに取り込んだ、開放的な空間が広がります。2階には対照的なプロポーションをもつ2つの展示室があり、3階の天井高約7mの豊かなスケール感をもつ展示室へと続きます。さらに、正面左側の大階段はアートへのさまざまなアプローチを可能にするパブリックな空間へと接続しています。2階のアートセンターには、ライブラリー、ホール、スタジオが備わり、3階最奥部にあるカスケードプラザとカフェも来館者に心地よい時間を提供します。



4



5



6

4-6 Photo: Yoshiro Masuda

【アクセス】 JR丸亀駅南口より徒歩1分

